

学校と企業・経営者の 交流活動 活動報告

学校現場からの高い評価を得て、着実に広がりにある、学校と企業・経営者の交流活動。今回は、①遠藤勝裕委員長をはじめ4名の講師による特色ある出張授業の最新事例、②2月17日、3月2日に北城悟太郎代表幹事が行った講演、③生徒・教師・保護者を一堂に招くという初の試み「教育フォーラム」の様子を報告する。

1 4名の講師が「創」「工」「商」「物流」を テーマに出張授業を実施

1月27日、茨城県鹿嶋市の私立清真学園高等学校・中学校で実施された出張授業は、「働くとはどういうことか—経営者に学ぶ“仕事”—」を共通テーマとして行われ、経済同友会からは4名の講師が派遣された。

学園側の希望に応え、
「物流」を含めた4テーマで授業

茨城県鹿嶋市の私立清真学園高等学校・中学校（以下、同校）は、1978年より中高6年一貫教育を掲げ地域に根ざした教育を行っている。同校は県内有数の進学校で、職業教育にも力を入れており、中学3年時には職場体験を、高校1年時には企業・工場・研究所等見学や同校OB・OGとの職業座談会等を実施している。また、総合的な学習の時間や「土曜セミナー」を活用して、生徒たちに職業について考える機会を提供。今回の出張授業は、國學院大學久我山中学校で行った出張授業（小誌2006年10月号掲載）の内容を知った同校から、「『物流』を加えた4テーマで我が校でも実施し

たい」との要請があり企画され、「土曜セミナー」の中で実施された。

共通テーマは、「働くとはどういうことか—経営者に学ぶ“仕事”—」。浦野光人、平田正、遠藤勝裕、廣川和男の4氏が講師を務め、それぞれ、「創」「工」「商」「物流」について授業を担当した。茨城県は、メーカーの生産拠点が多数ある他、生鮮品等の食



品流通も活発なため、『物流』は大事なテーマであるという認識からだ。各テーマごとにクラスが分けられ、生徒たちは事前に希望した授業に参加。授業中は熱心にノートを取る姿が目立つなど、生徒たちの積極的な姿勢が目についた。

*テーマと講師

- 創** 「安全でおいしい食品づくり—『おいしさ』と『新鮮』のネットワーク—」
浦野光人氏（ニチレイ 取締役社長）
- 工** 「これからの社会を生きるために—21世紀はバイオの時代—」
平田 正氏（協和発酵工業 相談役）
- 商** 「働くこと—世の中の仕組みを知ろう—」
遠藤勝裕氏（日本証券代行 取締役相談役）
- 物流** 「企業で働くということ」
廣川和男氏（スミセキ・コンテック 取締役社長）

浦野光人氏（ニチレイ 取締役社長）

物づくりや技術の原点は、 世の中の役に立ちたいという情熱

私たちの会社の役目は、食品を通じて世の中の役に立つこと。おいしくて安全、そして健康にいい食べ物を食卓に届けたいと思っています。みなさんの中には、冷凍食品にあまりいいイメージを持っていない人がいるかもしれません。ですが、長年の研究で、食品の温度をマイナス18度にすることで製造直後の品質が保てることがわかったり、食品の組織や栄養素を壊さない技術を開発したりしました。このような物づくりや技術の原点はすべて、世の中の役に立ちたいという情熱なのです。



甘味、酸味、塩味、苦味、うま味の基本5味を当てる味覚実験に取り組む生徒たち。工夫を凝らした授業に反応も上々。出張授業には初登場となる浦野氏も手応えを感じていた。

遠藤勝裕氏（日本証券代行 取締役相談役）

世の中の役に立ちたい！ その気持ちを持ち続けてほしい

高校時代、兄の本棚にあった『小説日本銀行』を読んで、世の中には『世の中の役に立とうとする人』と、それを『邪魔しようとする人』がいるのだと、漠然とわかりました。それならば、「役に立つ人になりたい」と考えたのが日本銀行で働きたいと思ったきっかけでした。日本銀行の役割は、いつでも、どこでも、どんなときでも安心してお金を使える状態にすることです。日本銀行は、阪神淡路大震災のとき、きちんとお金を流通させて被災者が困らないようにしました。このとき、私自身も世の中の役に立てたという実感がありました。



「世の中に何かの形で貢献するという気持ちが必要」という遠藤氏。講演では、働く意味、「商」の仕組みなどについても話した。

ダイジェスト

平田 正氏（協和発酵工業 相談役）

成功するには他人と 同じことをやっているではダメ！

私は、新薬開発の仕事をしていましたが、会社に入って10年間はほとんど結果が出ませんでした。そんな時でもいつも思い続けていたのが、「何としても自分で新しい薬をつくる！」という夢です。この夢があったから、辛い時代を乗り越えられました。皆さんにも、ぜひ夢を持ってほしいと思います。そしてもうひとつ、大勢の人が行かない道を行ってほしいと思います。グローバル社会では、激



研究者時代、他のどの研究者もやっていないやり方で新薬を開発した平田氏。自分の頭を使って考えることの重要性を説いた。

しい競争が待っています。他のみんなと同じことをやっているでは、それに巻き込まれるだけ。他人と違うことをしていても、怖がる必要はないのです。

廣川和男氏（スミセキ・コンテック 取締役社長）

自由でなければ、本当に世の中の ためになる仕事はできない

私はかつて、シンクタンクというところで働いていましたが、日本のシンクタンクの多くがそうであるように、親会社がついているため、その意向に反することは言えませんでした。一方、米国の大きなシンクタンクは、寄付金で運営しているところが多く、そうしたしがらみがありません。だから、「本当に世の中のためになることは何だろうか」ということだけを考えて、研究に没頭したり提言を発信できたりします。つまり、自由でなければ“本当の仕事”はできないのです。



「この世の中をいかに良くしていくか、暮らしやすく住みやすくしていくかに取り組んでいるのが企業というもの」と、企業の役割をわかりやすく説明した廣川氏。



2 北城代表幹事が中学生に語る

北城恪太郎代表幹事は、7年前から継続して教育現場に出向き、講師を務めている。今年に入ってから、2月17日には渋谷区主催の「こども夢チャレンジ文化講演会」で、3月2日には静岡県沼津市立浮島中学校で、それぞれ講演を行った。

他の国にできない仕事を
皆さんにはやってもらいたい

ほ とんどの人は、大人になると働きます。20歳の頃から60歳前後まで、人生の中で最も大切な40年くらいの間、大半の時間を仕事に使います。このとき、自分のやりたいこと、得意な分野で仕事ができれば、人生は有意義で楽しいものとなるでしょう。「どの学校に行くか」はあまり重要ではありません。「卒業した後、何をするのか」が大事で、そのための準備をするのが学生の期間です。

ところで、今、日本は世界第2位の経済力を持った先進国です。ですから、地球温暖化や貧困などの地球全体の問題の解決に、積極的に努力しなければなりません。

ただ将来を見通してみると、日本より中国やインドの経済発展の方が活発になるでしょう。日本は

人口が減り始めていて、今後、大きくは成長しないと考えられています。2020年までには、経済の規模で中国は日本を抜きます。そして中国やインドの人々は、豊かになろうと必死に努力をしています。今の日本の豊かさを将来にわたって維持したいのであれば、他の国の人たちにはできないような仕事をしなくてはなりません。それをどのようにやっていくかが、皆さんのこれからの課題です。

得意なものを見つけてほしい

第二次世界大戦後の日本は、米国やヨーロッパに追いつこうとしてきました。それは正解のある世界であり、知識や正解を答える力が求められました。しかしこれからの日本は、自らの力で問題を見つけ出し、正解がわからない中で答えを出していかなければなら



いのです。

そうした社会の中で皆さんに必要なものは、第一に高い倫理観だと思います。「何が正しいことなのか」がわかる力が必要です。次に、国際社会で通用する教養や基礎学力も大切です。それから、自分で問題を見つけ、考え、行動する力、コミュニケーション力が、これからの時代には必要なのです。

最後に、「一芸に秀でよ」という言葉を皆さんに贈りたいと思います。何か自分の得意なものを見つけてください。そして、人生にはきっかけがあります。そのきっかけを見つけて挑戦してみてください。私はこれまで、「明るく、楽しく、前向きに」生きてきました。なぜできないかを考えるよりも、どうすれば実現できるかを考える方が大事だと思います。この「明るく、楽しく、前向きに」を覚えておいてもらえると、これからの皆さんの人生の中できっと役に立つときがくると思います。

北城氏の著書を契機として

沼津市立浮島中学校での北城氏の講演が行われる契機となったのは、北城氏の著書『経営者、15歳に仕事を教える』(2004年12月／丸善)だった。浮島中の西川哲校長は、その本を知人に勧められて読み、強い感動を覚えたという。全校生徒に朝礼で本の紹介もした。また、西川校長は本の感想を添え、経済同友会に北城氏の講演を依頼した。その結果、3月2日に実現

の運びとなった。「日本のトップで活躍する方の話を子どもたちに聞かせたい」という思いは、学校・保護者・地域に共通のもので、講演は109名の全校生徒の他にも、多数の来場者がある中で行われた。



北城氏の著書を手にしなが、講演が実現するまでの経緯を説明する西川哲校長。



**Q. 英語が上手になるにはどう
いう勉強をすればいいのですか？**

「これはよく聞かれる質問です。私の経験で言うと、どんな方法でもいいので、とにかくいろいろやってみる事です。半年も努力すれば成果が出てきます。そうすると、おもしろくなってきます。そして、勉強に終わりはありません。あらゆる機会を通じて学ぶことが大切です。私は、今でも財布にカードを入れていて、気に入った英語の表現などを書き留めるようにしています」

**Q. 目標を見つけるには、どう
すればいいのでしょうか？**

「『将来どういう仕事に就きたいのか』を目標だとすれば、常に自分が何をやりたいのかという問題意識を持って、周囲を観察することが大事です。探そうという気持ちがあれば、見つけることはできません。私は小学生の時、『ノーベル賞を2つもらった人はもういるから、3つ取りたい』と言ったことがあります。実現しなくてもいいんです。その時にやりたいと思うことを見つけ出して、とにかく挑戦してみてください」

「どうすれば英語が上手になりますか？」
「失敗して落ち込んだ時、どうしていますか？」

**Q. 仕事で失敗し
たり、挫折したりし
たとき、どうしてい
ますか？**

「私は挫折したことは一度もありません。全力で努力する、自分でできることはすべてやり尽くす、それでも上手くいかなかったらそれでいいじゃないか、と割り切っています。そして、次の挑戦に進むようにしています。ですから、落ち込むということはないのです」

**Q. 中学から努力をすれば、北
城先生のように偉くなれますか？**

「私が努力して勉強したのは高校生になってからなので、中学の頃から一生懸命やれば私以上になれるすよ(笑)。私は会社に入った後、第一線のエンジニアでずっとやっていましたから、出世は遅かったのです。必ずしも早く偉くなったから、そのままずっと偉くなっていくというものではないと思います。たとえどんな仕事でも努力をすれば、ちゃんと見てくれる人がいるものです。どの段階でも、その場所で全力を尽くすことが大事です」

**Q. 日本が国力を上げていくに
はどうすればいいのですか？**

「日本は、経済で世界に貢献することができます。環境技術で地球温暖化の問題を解決していくことや、我々の豊かな経済力を使ってアフリカやアジアの困っている人を助けていくこと、などです。ただし単に物をあ

**「日本はこれから
どうすればいいのですか？」**

げるのではなく、いろいろな国の発展を手伝うことができる国でなければいけません。ところが日本が貧しくなってしまうと、手伝うことはできません。ですから、日本の経済が発展を続けることが大事なのです。その上、国や地方自治体の莫大な借金を返していかなくてもなりません。では、どうやって経済を発展させ借金を返していくのかというと、結局、イノベーションをしていくしかないと考えています。他の国の人たちにできないような新しい挑戦をし、世界の中で役に立つことが、日本経済の発展、国力の向上につながるのです」

**Q. 社員の採用の面接でいちば
ん重要視している点はどこですか？**

「会社によって違うとは思いますが、最も見ているのは、『意欲がある』『情熱を持っているか』という点です。日本の多くの会社は世界の最先端でビジネスをしていますから、他の会社の真似をしても成功はしません。他の人が考えつかないようなことを見つけなければなりません。常に問題意識を持ち、自ら考え、挑戦しようという意欲を持った人が必要とされるのです」



3 教師、生徒、保護者を招いた 初の試み「教育フォーラム」を開催

「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」（遠藤勝裕委員長）は、2003年度より、1年間の活動の締めくくりの意味も込めて、毎年度末に教育関係者を招いたパネルディスカッションを開催してきた。4回目となる2006年度は、これまでとはまったく異なる趣向で、3月24日に「教育フォーラム」を開催。教師、生徒、保護者を迎え、経営者と語り合う場を設けようという意欲的な試みであり、昨年12月から、その準備に取りかかった。当日は、教師・生徒・保護者ら150名以上が集まり、普段は接することのない人々との交流が実現した。



何のために「学び」
何のために「働く」のか

今回の教育フォーラムには、応募で集まった中学生・教師・保護者140名と、交流活動推進委員会のアドバイザー、交流のある教育関係者約20名が参加した。経済同友会からは、北城代表幹事と交流活動推進委員会の委員10名（右頁参照）が出席した。

開会の挨拶に立った遠藤委員長は、交流活動の目的とこれまでの経緯を紹介した上で、まず、生徒に向けて「将来、自分がどんな仕事をしたいか考えたことはあるだろうか？ このフォーラムが、将来の進路を考えるための手助けとなれば嬉しい」と呼び掛けた。また、学校関係者および保護者に対しては「これからの社会で求められる人材と教育のあり方について語り合えるこの機会を大切にしたい」と語り、学校・保護者・経営者が一堂に会することの意義を訴えた。

続く第1部では、1999年の交流活動開始当初より自ら率先して出張授業に出向いている北城恪太郎代表幹事が、『これからの国際社会

教育 * フォーラム

「働くことについて考えよう ～将来、社会に出て活躍する若者へ～」

- 第1部 基調講演 北城恪太郎代表幹事
『これからの国際社会に生きる君たちへ～人は何のために働くのか～』
- 第2部 経営者とのグループディスカッション
◇生徒グループ『働くってどういうこと？』
◇教員グループ『これからの社会で求められる能力と教育のあり方』
- 第3部 交流会

に生きる君たちへ～人は何のために働くのか～』というテーマで基調講演を行った。

講演を聞いた生徒たちからは、「人生にはきっかけがある。それをとらえて活かすという言葉が印象に残った」「働くためには、学力・知識だけでなく、思いやりやコミュニケーション力などが必要だということがわかった」といった感想が寄せられた。また、教師や保護者の間では、「自ら正解のない課題に取り組み、考え、行動する力をつけてこそ、初めて社会で通用する人材になることを再確認した」「勉強の必要性を経営者の視点からわかりやすく説明してもらったことが生徒には新鮮に映ったはず」（教師）、「有名な学校に進むのではなく、どんな仕事をした

いかで進路を決めることが重要だと痛感した」（保護者）といった声が目立った。

経営者と生徒・教員が 本音で真剣に討論

第2部は、参加者が10名程度のグループに分かれ、それぞれのグループに交流活動推進委員会の委員1名が講師として加わるという形式のグループディスカッションを行った。

6つの生徒グループでは、講師それぞれの個性あふれるスタイルで『働くことの意味』を一人ひとりに考えさせ、意見を出し合った。最初は緊張気味だった生徒も、自己紹介を行い、言葉を交わすうちに打ち解けた雰囲気となり、身振り手振りを交えて熱く語りかける講師に刺激され、次第に大きな声



とについてどう考えているかを知ることができた」「働くことは大変なことだと思っていたが、それ以上に喜びややりがいがあることを知った」「違う学校の人の考えや意見を聞くことができて良かった」など、前向きな感想が多く寄せられた。

で発言するようになっていった。また、そうした子どもたちを頼もしそうに見守る保護者の姿も印象的だった。

一方、『これからの社会で求められる能力と教育のあり方』をテーマにした4つの教員グループでは、講師側の問題提起から議論が始まった。「実社会から教育現場はどう見えているか」という観点から、厳しい指摘も出てきた。教師側からも、実社会と学校教育とのギャップ、公教育のレベル低下、学校を取り巻く地域の現状、生徒の意識の変化など多くの問題が提起された。その後、「今の教育現場に対して企業・経営者・地域の大人として何ができるか」「どの問題から手をつければいいのか」などを巡って意見が交わされた。

グループディスカッションに参加したのは、出張授業を行った実績のある学校の校長や教諭がほとんどで、経済同友会の交流活動に対する信頼感を持っており、率直に意見が出せたようだ。また、経

営者との交流が学校現場に与える好影響を認識しているという点から、学校と企業や社会との連携について実りある議論となった。

入念な準備の下で より実りのある交流活動を

今回の教育フォーラム開催にあたっては、事前にアンケートを実施。生徒には、所属部活・得意な科目・将来の夢・経営者への質問を、教師には担当教科・モットー・経営者への質問を記入してもらい、同じグループの参加者に配布した。こうした事前資料が用意されたことで、各グループでの議論が中身の濃いものとなり、特に、生徒グループでは、生徒の関心に沿った話の方向付けに役立った。

ディスカッション終了後に参加者全員にアンケートを実施したところ、生徒からは「自分の考えを深められた」「みんなと同じでなくてもいいことに気づいた」「失敗を恐れず挑戦することは、自分の世界を広げることだということが分かった」「同い年の仲間が、働くこ

一方、教師からは「これから社会で生きていくために何が求められているのか、子どもたちをどう育てていくかを整理する良い機会となった」「私立・公立に関係なく、他の学校が抱えているいろいろな問題を知ることができた」など、今回の企画を評価する意見が大半であった。

今回の講師を務めた10名の委員もそれぞれに確かな手応えを感じたようで、最後に行われた交流会では、参加者と談笑する様子が随所で見られた。経済同友会として初の試みであったが、参加者一人ひとりにとって意味のあるフォーラムになったと言えるだろう。



教育フォーラム参加講師

遠藤勝裕氏
(日本証券代行 取締役相談役)

大塚良彦氏
(大塚産業クリエイツ 取締役社長)

尾原蓉子氏
(IFI[(財)ファッション産業人材育成機構]
IFIビジネス・スクール 学長)

小林いずみ氏
(メリルリンチ日本証券 取締役社長)

小林恵智氏
(インタービジョン 取締役会長)

同前雅弘氏
(大和日英基金 副理事長)

西田一郎氏
(国際基督教大学 理事・総務副学長)

野呂正則氏
(大星ビル管理 取締役社長)

茂木賢三郎氏
(キックマン 取締役副会長)

山中信義氏
(日本コンラックス 取締役会長)

(以上10名、学校と企業・経営者の交流活動
推進委員会 委員長、同 副委員長、運営委員)